ひんがしによき国ありて

佐沼高校の校歌に関する考察と推論

第11回講話（２０１６年度版）山田悦且

昭和二四（一九四九）年春　六十三歳時の釈迢空

（「世々の歌びと」　折口信夫著より、角川文庫刊）

☆はじめに　日本語なのになぜ分からない？

昭和二六年八月のこと。三年前、旧制中学校から新制高校に衣替えしたばかりの佐沼高校に新しい校歌の歌詞が届いた。作詞者は当時六十四歳だった釈迢空。格調高い万葉調の歌詞だった。だが、生徒たちには極めて難しかった。

幸いなことに、同高には当時、迢空の薫陶（くんとう）を受けた菊池一（はじめ）教諭がいた。それゆえ、生徒は同教諭を通じて難解な校歌の意味を知ることができた。しかし、定年後も講師を務めていた菊池氏は昭和五〇（一九七五）年度末、半世紀に及ぶ同高での勤務を終えた。以来、校歌の内容を詳しく伝える機会が減ってしまった……。

ところで、校歌は間違いなく日本語で書かれてあるはずだ。新入生の諸君は国籍を別にして日本語で読み書きすることができるはず。それにもかかわらず、理解しにくいのはなぜだろう？　それは恐らく、つい先日まで中学生だった諸君には、英語より手ごわい古語、

つまり文語体で書かれているためだだろう。

次に、釈迢空という作詞者の難しくて変わった名前。「しゃく・ちょう・くう」と読む。彼は一体、何者？　中国人？　朝鮮人？　韓国人？　台湾人？　そして彼の職業は？　僧侶？　分からないことだらけ。そのため、聞きたくもない余所者の授業を新年度早々、聞かなければならなくなった。これを拷問と言わずして何と言うのだろうか。

いっそのこと、こんな小難しい校歌は捨てて「校歌を現代風のヒップホップ調に変えて下さい』という署名活動でもしたらいかがか。しかし、皆さんが一致団結して校歌の追放に取り組んだところで、一笑に付されるだけだ。佐沼高校の卒業生だけでなく登米地域の人々にとって、この校歌はそれほどまでに大切な地域の宝物であるからだ。

本日の講話は、諸君には難しすぎると思う。だが、分からなくても良いから脳裏に焼き付けておいてほしい。将来、「あの時に聞いた話」という日がきっとやって来る。高校生に少年から青年になるための、大人の入り口に立つ第一歩だと考えてほしい。

☆万葉調の歌詞をいざ解読

校歌を通じて、釈迢空は私たちに何を説こうとしたのか？

それではさっそく、校歌を訳してみよう。日本を代表する文学者でもある彼の文体は古語を多用するうえ、短詩系であるために途中の説明を省くことが多い。この作品もその例に漏れない。つまり、歌詞をそのまま解釈しようとすると意味が通らなくなってしまう。そこで言葉を補いながら、行間に隠された真意を探る必要がある。また、校歌に使われている日本語は、現代の日本語とは明らかに違う。理解するには、中学生時代にはあまり縁のなかった「古語辞典」を片手に読み進めなければならない。

一～三番の歌詞は一読すると、朝、真昼、夕方と一日の動きを追って描かれていることが分かる。しかし、単に登米地方の「とある一日」を描写したとは捉（とら）えないでほしい。時や川の「流れ」には、国や地域の古今と未来（歴史）、代々受け継がれた知識や経験の積み重ねの尊さが隠れていることは言うまでもないのだから。

歌詞には古代中国から伝わり、現代でも生活の中で息づいている自然哲学思想・陰陽道（おんみょうどう）の考え方（方位や季節）も潜んでいる。つまり、一番の歌詞には朝と同時に東と春の情景が、二番には真昼と同時に南と夏の景色が、三番では夕方と同時に西と秋の景色が描かれていることが分かるだろう。

一番＝朝、東、春

ひんがしによき国ありて
北上の遠山を朝空に垣とせり
心すぐなるよき人の常に和みて住むところ
われら清しく行き交ひて　若き礼譲里に充つ
（いさぎよし　我が佐沼　あゝ　佐沼高等学校）

東方の一角にとても暮らし易い理想郷があり、
北上山系の織り成す境界が朝空の中に輝いている。
（そこには）実直で心やさしい人々がいつの時代も仲睦まじく暮らしている。
私たち（佐沼高校生を含む若人）も清らかな交流を深めており、
若さ溢れる礼儀正しさと謙虚さとが地域全体に満ち満ちている。

二番＝真昼、南、夏

野に出でて聴け水の音
昼深きせせらぎはとほく来て遠く去る
迫川その瀬のそよぎ
日々に学問新しく　技術とりどり潔らかに
青春とこしなへならむ

（みづみづし　我が佐沼　あゝ　佐沼高等学校）

野外に出て耳を澄ましてごらん。ほら、水の音が聞こえて来るだろう。
真昼に聞こえる水の流れる音は（私たちの知らない）遠方から流れてきて、未知の地へとまた去ってゆく。（私たちも来ては去る、はかないせせらぎのような存在ならば）
迫川の浅瀬にそよそよと打ち寄せる波のように、日々新しく変化する学問とさまざまな技術の習得に、潔く取り組もうではないか。
（そうした弛まない努力を続けることによって）若い世代に抱いた理想や夢、精神的な若さ＝青春を永久に持続させることができるだろう。

三番＝夕暮れ、西、秋

栗駒の空夕やけて　しづかなる夜の思ひ

陸奥の荒野らを悉皆田に墾りし祖々の
代々の経験とほけれど
匂ひやかなる近代の智識の外のものならず
（かがやかし　我が佐沼　あゝ　佐沼高等学校）

（西方にそびえる）栗駒山の上空が夕焼けに染まる頃、間もなく訪れる夜の静寂（しじま）に思いを馳せてみよう。（すると浮かんでくるだろう）

祖先たちが（汗水を流しながら）一面に広がっていた荒野をことごとく耕し、見渡す限りの水田として切り拓いた労苦の姿が。

そうした先人たちの尊い経験は遠い昔のことになり、今では見聞きすることはできない。

けれども、それらの実績は華やかに輝く現代の知識の集積の中に埋まっている。

（だからこそ、私たちは謙虚にそれらの知識を掘り起こし、身につけることで、過ぎ去っ

た事象も十分に理解できるのだ）

☆格調高い文語体の秀作

歌詞の解読に入る。まずは一番の歌詞。

「ひんがし」とは「東」のこと。朝日に真向かうことから「日向かし」＝「ひむかし」。「し」はと言うのは「風」の意らしい。つまり、だから「朝日の方角から吹く風」というのが直訳だったのだろう。それが「ひむがし」「ひんがし」と変化し、更に「ひがし」なった。それゆえに「ひがし」は当然「朝」を意味している。

と同時に「ひんがし」は季節の「春」を表している。その証拠を提示する。わが国の金融政策を司る日本銀行の総裁は誰か。「黒田東彦」と言う。「東」と書いて「はる」と読ませている。つまり、一番の歌詞の冒頭でいう「ひんがし」とは東方を表すと同時に、季節の春を表現していることが今も生きている漢字の解釈から理解できると思う。

次に「垣」はいわゆる「垣根」や「境界」の意味。ここでは境界だろう。

「国」は国家ではなく、狭い範囲でのクニ＝「地域」と受け止めた方がいい。

「良き国」はただ単に「良いところ」「良い国」というわけではなく、「住み心地が良い」「風光明媚で暮らしやすい」「良心が充ちている」などあらゆるプラス要素が加味された地域を指す。ゆえに「理想郷＝ユートピア」と意訳した。

「心すぐなる」は「心直ぐなる＝真っ直ぐな心を持った＝実直」の意味。

「礼譲」とは礼儀正しく謙虚なこと。

続いて二番の歌詞。

さわりとも言える「昼深きせせらぎはとほく来て遠く去る」に注目してほしい。私たちは誰もが、先人から受け継いだ「大切なもの＝知識や経験」を自分たちの力で発展・熟成させ、次世代に送り出す責務を負っている。迢空はそれを絶え間なく流れていく「川」で

表現しようとした。

この部分は、続く三番の歌詞「代々の経験とほけれど　匂ひやかなる近代の智識の外のものならず」に受け継がれていく。つまり彼は、先人が遺した知識や技術を更に熟成させ、次代に引き継ぐための手段は、「周囲に満ち溢れている輝かしい知識の中から学び取る以外にない」と断言しているわけだ。

ところで「せせらぎ」とは「川や水の流れが醸し出す音」のこと。

また「昼深きせせらぎ」の「昼深き」は、「昼深き＝昼真っ盛り・昼たけなわ」の意味。松尾芭蕉の最晩年の句「秋深き隣は何をする人ぞ」の「深き」と同じ用法だ。

そこで「真昼に聴こえてくる水の流れる音」と理解できる。続く「そよぎ」も「そよそよとしている様子」であり、せせらぎとほぼ同一の意味だ。

ともに美しい語感を持つ「水の音」「せせらぎ」「そよぎ」を繰り返したのはなぜか。単に登米の美しい情景を描こうとしたのではあるまい。

迢空は、先人たちが後世の私たちに遺そうとした「つぶやき」や「囁き」、つまり「遺言」を水の音に託したのだろう。同時に、先人たちから脈々と受け継がれた「伝統」や「歴史」、「知識」や「経験」を持つ美しい祖国を「水の流れる音」でさまざまに表現したかったのかもしれない。

ところで、二番の歌詞の中で最も難しく、彼がメッセージの一つとしたかった個所が「青春とこしなへならむ」だと考えている。この部分を生徒諸君は「青春とこし」「なへならむ」と歌う。これはいわゆる「七五調」の言葉に合う音符をつけたために起きた珍現象。だから、意味が全く分からなくなる。

実は「青春とこしなへ」と「ならむ」とに分けると理解できる。「とこしなへ」とは「永しなえ＝常しなえ＝永久に続く」という意味。そこに「ならむ＝なるだろう」がつく。訳せば「永続するだろう」もしくは「永遠に続くだろう」となる。つまり「青春は永遠に続くだろう」となる。

三番の歌詞の理解もまた、二番に劣らず難しい。

特に「荒野らを悉皆田に墾りし祖々の」は「荒野らを」「悉皆田に墾りし祖々の」と歌うため、意味不明となる。だから「『悉皆田ってどんな田んぼ？』」という疑問を持つに至る。

そんな田んぼはない。この部分は「荒野らを悉皆（ことごとくみな＝しっかい＝「みな」と読ませた）」「田に墾りし祖々の」と理解すればよい。つまり「荒れ野をことごとく田圃に開墾していった先祖たち」ということだ。音符に騙されてはいけない。

「匂ひやか」は「匂やか」。「やか」とは「穏やか」「賑やか」「華やか」「鮮やか」などと同じ用法で、名詞や形容詞について形容動詞の語幹を作る接尾語。「匂ひ」は現代の感覚と違い、「美しく輝く」と解釈すれば分かりやすい。

ここで私の「勝手な解釈」を二つ披露する。

一つ目が「校歌には古代から続いてきた陰陽道の考えが潜んでいるらしい」と説明したこと。その証拠が校歌の二番に出てくる「青春」という言葉。

何気なく使っているが、皆さんは「春の色がなぜ青なのか」を考えたことがあるだろうか。春が「青葉茂れる」季節だからではない。

もちろん、春に色があれば当然「夏」「秋」「冬」にも色があるはず。さて何色か？　答えは「夏は朱（赤）」「秋は白」「冬は玄（黒）」。

それを解く鍵が、陰陽道には不可欠な守護神、青龍（東、朝、春を司る）、朱雀（南、昼、夏を司る）、白虎（西、秋、夕方を司る）、玄武（北、夜、冬を司る）の「四神相応」というわけだ。つまり、陰陽道で解けば、一番の歌詞は「青龍」、二番の歌詞は「朱雀」、三番の歌詞は「白虎」を意識した内容ということができる。迢空は陰陽道の世界さえも校歌に織り込んでいたのだった。

二つ目が、二番の歌詞「日々に学問新（あたら）しく」を、実は「新（あらた）しく」と読ませたかったの

ではないだろうか？という疑問だ。

なぜなら①校歌が万葉集を強く意識して作られたらしいこと②迢空が万葉集研究の第一人者であったこと③万葉集を編んだといわれる大伴家持が同集を締めくくる作品として、自作の「**あらたしき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事**（しよごと）」＝**第四五一六番**（新年の始めの今日降り積もっている雪のように、今年も良いことが重なりますように）を入れたこと、などを考慮するとこのような推論に至ってしまうのだ。

☆校歌から読み取る校訓

佐沼高校の校訓は「至誠　献身　窮理　力行」だ。賢明な諸君ならば、一～三番の歌詞には、校訓にある四つの言葉の神髄が散りばめられていることに気付くだろう。それでは、四つの言葉はどこに隠されているのだろうか。

まず一番の歌詞「心すぐなるよき人の常に和みて住むところ　われら清しく行き交ひて

若き礼譲里に充つ」は至誠（誠実、真心）の精神そのものだ。

二番の「日々に学問新しく　技術とりどり潔らかに」からは窮理（物事の道理・法則を窮める）が読み取れる。

三番の「陸奥の荒野らを悉皆田に墾りし祖々の　代々の経験とほけれど　匂ひやかなる近代の　智識の外のものならず」は献身（自己犠牲の精神）と、力行（努力し、励むこと）」を見事に表現している。もちろん、釈迢空が意識的に四つの言葉を連想させる文章を採用したかどうかは全く分からない。だが、作詞していた迢空の許に「至誠　献身　窮理　力行」の校訓は届いていたはずだ。四つの言葉を連想させる文章が偶然、校歌に散りばめられたと考えるより、彼がうまく散りばめたと思料したい。

校訓は校歌のできた三十三年前の大正七（一九一八）年に制定された。だが、軍備拡張の足音とともに、昭和一四（一九三九）年に軍国調の別な内容に変えられた。しかし、当時の旧制佐沼中学校関係者は戦時中の昭和一八年、校訓を再度「至誠　献身　窮理　力行」

に戻し、それまでの校訓を教育目標とした。軍関係者を根気強く説得したのだろう。旧制佐沼中、新制佐沼高ＯＢにとり、「校訓」はそれほどまでに思い入れのあるものだった。

☆脳裏に浮かんだ五冊の名著

三十四年前の昭和五七（一九八二）年春。新聞記者としてこの地に赴任して間もない私は、佐沼高校体育館に掲げてある校歌の歌詞の前に立つ機会を得た。運動不足を解消しようと、バスケットボールを八年ぶりに再開し、当時の同高バスケットボール部員やＯＢたちと快い汗を流し始めたのだった。その時、校歌の歌詞が書かれた大きな額が目に飛び込んできた。作詞者・釈迢空の名前に驚くと同時に、歌詞の奥深さに魅了された。

それから二十年が経過した平成一四（二〇〇二）年。登米市での定住を始めた私は再び同高体育館を訪れ、高校生たちとバスケットボールを再開し始めた。校歌の歌詞は以前と変わらず、同じ場所に掲げられていた。それをまじまじと見つめていた私に女子バスケッ

トボール部員が話しかけた。「歌詞も作詞者も全く分からない」。その言葉にびっくりして、訳してみようと考えた。すると、校歌の行間から直感的に五冊の名著が浮かんできた。

名著とは次の五冊。一、二冊目はこの辺りの漠然（ばくぜん）とした記述が歴史に初登場する、わが国最古の歴史書「**古事記**」（七一二年編）と、最古の国史書「**日本書紀**」（日本紀）」（七二〇年編）。続く三冊目は、この辺りに住んでいた人々の動きが具体的に出てくる二番目の国史書「**続日本紀**（しょくにほんぎ）」（七九七年編）。四冊目が歌詞の至る所に散りばめられた言葉から連想されるわが国最古の和歌集「**万葉集**」（八世紀後半の刊行か？）。最後の五冊目が、彼の遺稿ともいうべき最終歌集「**倭（やまと）をぐな**」（昭和一六ごろ～二八年ごろの作を収録。自選部分は昭和二三、二四年ごろの編集か？）だった。

この名著五冊に加え、迢空の愛弟子だった菊池一教諭の遺歌集「**菊池一歌集**」（平成５年４月発行）も参考にした。ほかにもっと、この校歌を分析できる書物があるかもしれない。だが、拙い知識しか持たない私は、この六冊を使って校歌の謎を解き明かすことにした。

☆祖国の復興を若者に託した「遺言」

迢空はなぜこのような内容の歌詞を書いたのか。歌詞が作られた頃の時代を振り返り、校歌が制定された昭和二六年当時の釈迢空の胸中を察してみた。

敗戦から六年しか経過していない時代背景をまず思い浮かべる。当時の彼は古代から続いてきた「美しい日本」の荒廃や、最愛の養子・春洋（はるみ）の硫黄島での戦死など、重なる無情に襲われていた。荒れた国土を見つめていた彼の脳裏には、否応なく古代から連綿と続いてきた国家の繁栄と瑞穂の国の美しさが映っていただろう。そこで、古代のわが国に心の拠り所を見いだそうとしていたのではないだろうか。

校歌の歌詞を練っていた頃、迢空は遺作となる第六歌集の最終点検をしていた。それには既に**「倭をぐな」**という名がつけられていた。**この歌集こそ、佐沼高校校歌の背景を解き明かす手がかりの一つ**ではないかと考えた。歌集「倭をぐな」の中には「思ひを次の代によす」と題した三首がある。

今の世の幼きどちの生ひ出でゝ　問ふことあらば、すべなかるべし

（敗戦直後の）今、幼い仲間が生まれてきて、何かを私に問うならば、答えられずに困ってしまうに違いない。

年長けて　子らよ思はね。かくばかり悔しき時に　我が生きにけり

若人よ、大人になったら思い起こしてほしい。（祖国が荒廃し、最愛の人に去られて）こんなに悔しい思いをしている私でも生き延びてきたことを。

いちじるく深き思ひは　相知れど、語ることなし。恥ぢに沈めば

ひどく傷ついた心境は互いに察しているけれど、無言を貫こう。面目を失って落ち込んでいるのであれば。

校歌を作っていた彼の心境もこのような感じだったろう。彼は祖国の再興を次世代に託

すことで絶望の淵から脱出しようとし、その気持ちを校歌に込めた。敗戦からの復興を担う若人に、先人たちが蓄積した数々の苦労や努力、英知や経験を学んでもらおうとした。そこから得た知力で打ちひしがれた日本を立ち直らせる原動力になってほしいと期待した。最高峰の知識人が渾身の力を込めた悲痛な叫びでもあった。

こうした経緯で作られただけに、校歌の文学的な価値は極めて高い。意味を解さずに歌うのではなく、彼の思いを浮かべて「戦後」という時代を考える時間を持つことが大切だろう。迢空の当時の心境は、東日本大震災を経験した私たちのそれとかなり似ていたはず。だからこそ、この校歌を今、じっくり味わう価値がある。

歌集「倭をぐな」には、養子の春洋が出征して戦死するまでの悲劇や終戦後の失意、失意から立ち直ろうとする決意が収録されている。迢空は春洋の硫黄島での戦死を、日本武尊の客死と重ね合わせながら歌集を編んだ。だから、歌集の題名となった「倭をぐな」は日本武尊ではなく、最愛の養子・春洋を指す。校歌はそうした心境の下で作られた。

祖国の焦土と、最愛の養子の戦死という二重苦の中にいた彼は、やるせなさの中で戦後の重い一歩を踏み出そうとしていた。その時、新しく生まれ変わった佐沼高校の校歌を作詞してほしいとの依頼を受けた。

傷心の彼は未来に希望を抱き、愛する祖国を元の美しい姿に戻したいと考えていた。だが、もう若くなかった。そこで、荒廃した国土の復興を若者に託そうと決意した。その「思い」が佐沼高校の校歌に盛り込まれた。これが**校歌に対する私見**である。

「倭をぐな」はわが国最初の歴史書に出てくる。日本紀(日本書紀)では「日本童男」、古事記では「倭男具那」と書き、今風に言えば「日本男児」の意味。「まほろばの歌」＝思国歌(くにしのびうた)で既に触れたが、それぞれ「倭建命」「日本武尊」を指す。読みはいずれも「やまとたけるのみこと」である。日本武尊は景行天皇の第三子で、伝説上の人物だが、東征中に現在の三重県内で客死したとされる。かつては紙幣の肖像にもなったほど有名な人物だ。ところで、日本書紀中の「倭をぐな」は、「東夷(あづまのひな)の中、日高見国あり」で始まる、登米市一帯と

思われる記述の近くに登場する。それは、日本武尊による熊襲や東夷征伐の記述であり、熊襲（くまそ）の族長・川上梟帥（たける）の問いに対し、日本武尊が自身を「倭をぐな」と名乗る場面があり、「倭をぐな」が「日本武尊」と同一人物だと分かる。

「日高見」は「ひたかみ」もしくは「ひだかみ」と読み、今の地名では「北上」に当たるとされる。少し横道にそれるが、「日高見」はとても響きが良い。本来は「朝日の出る方角＝ひんがし」や「日の本」という意味が込められていた。そのため、日本酒の銘柄に使われたり、三陸自動車道にかかる大橋の名前につけられたりしている。だが、古代には律令国家が私たちの祖先を蝦夷と呼んで蔑む時に使うようになった。

「日高見」の同義語は今も岐阜県の「飛騨」地方や北海道の日高地方に残る。畿内に本拠を置く律令国家の支配域が広がると、「ひんがし＝東方」にある非支配域は「飛騨」「日高見」「日高」などの蔑称で呼ばれた。つまり、この辺りを指していた「日高見国」が律令国家の支配下に置かれるようになると、律令国家の支配が及ばない地域は津軽海峡を越え、

現在の北海道が新たに蝦夷地＝日高と呼ばれるようになった。

つまり、校歌の冒頭に出てくる「ひんがしによき国ありて」の「よき国」は、当時の国家から疎まれていた地域だということができる。これが、校歌を読んで「古事記」「日本書紀」「続日本紀」を連想した理由でもある。

こうした背景を考えると、作詞の依頼を受けた迢空の脳裏には次第に、日本書紀に描かれたこの地方のイメージが広がったと考えられる。当然、続く国史書の続日本紀が描く世界も彼の脳裏には映っていたはず。この続日本紀こそ、登米市や栗原市を日本史上に具体的に初登場させた書物だからだ。同書には「古代蝦夷が桃生城から『遠山村（とおやま）』に逃げ帰った」とあり、遠山村が登米（とよま）の語源ではないかとされている。また、「栗原評（くりはらごおり）＝郡は、（多賀城の出城として造営された）伊治（これはり）城の造営を祝って設置された」との記述もある。

迢空はそのイメージを大切にしながら、最後の歌集を編み、同時に佐沼高校の校歌を書き進めていったに違いない。

名作が世に出るにふさわしい執筆の環境が熟成していった。だからこそ、単に校歌の歌詞という枠には納まらない秀逸が誕生したのだろう。迢空はまた、先人たちの血のにじむような努力も思い出してほしいと願って作ったのだろう。

この校歌はつまり、戦前戦後を通じてのわが国最高峰の碩学（せきがく）＝知の巨人ともいうべき迢空が、佐沼高校生を始めとする敗戦直後の若者たちに、敗戦で疲弊した日本の復興・復活を次世代に委ねたメッセージということができる。校歌にはその手段や方策が随所に散りばめられている。

碩学は校歌の中に「努力を惜しまずに先人が残した数々の英知に学べ」「学んだ知恵と知識を駆使して、敗戦で疲弊した祖国を再び立ち直らせてほしい」という願いを込めた。校訓や登米の歴史も巧みに潜ませた。迢空は校歌を完成させた約二年後に他界しており、結果的に「遺言」ともなった。

ところで、三番の歌詞「**代々の経験とほけれど　匂ひやかなる近代の智識の外のものならず**」を、身近な具体例で説明する。

私が生まれたのは昭和二八（一九五三）年一月十二日。一方、迢空が亡くなったのは同年九月三日。迢空は私が生まれた約八カ月後に黄泉（よみ）の国に旅立った。当然、迢空と私には接点が全くない。それにもかかわらず、迢空や校歌ができた経緯をこうして説明している。それはなぜだろうか。

迢空の経験や彼が表した学問は私にとって遠い昔の出来事だが、残された諸々の資料を読み取ることによって自らの知識にできる。

三番にある「代々の経験とほけれど　匂ひやかなる近代の智識の外のものならず」こそ、佐沼高校の校歌を使って彼が伝えたかった奥義ではなかったか。現代の高校生が情報を入手する手段は、スマホなどなどを利用するケースがほとんどだろう。

しかし、先人が遺してくれた情報は文字や絵などという形のアナグ情報が大部分だ。そこで再び言う。活字を読んで脳裏を大いに刺激させてほしい、と。

なおこの年、短歌界のもう一つの巨星、斎藤茂吉もこの世を去っている。

☆メッセージは「弛まぬ努力」

校歌を通じて迢空は主張したかったのは、「先人たちの英知を『弛（たゆ）まぬ努力』で学び続けてほしい」ということ。二番の歌詞にある「川の流れのように絶え間なく続いている、先人たちの知識や技術」を習得することで、その後ろにある「日々に学問新しく　技術とりどり潔らかに」と三番の「智識の外のものならず」が実現すると言いたかったのだろう。精進を続けることで過去を知り、過去を知ることで加齢に左右されない「若さの勢い＝青春」を保つこともできるというわけだ。

若人に次代を委ねようとした迢空の考え方は、校歌ができた時代だけにとどまらず、い

つの時代にも不滅の光を放つ「真理」を含んでいる。二十一世紀という時代や東日本大震災後の現代に当てはめれば、「若人よ。舵（かじ）取りの難しい時代の課題を克服し、次代を担ってほしい。そのためにも先人の知識を大いに取ってほしい」ということになる。

ただし、それには想像以上の努力を必要とする。現代は映像や電脳の発達により、それらの世界には多くの情報が詰め込まれている。だが、**先人の知識の大部分はまだ書物や文書という形で存在しており、文字を読み取る労苦が不可欠だ。**

そこで言いたい。「情報通信時代の今、文字から知識を得ることも忘れずに」と。

☆釈迢空とは何者か

ところで、何度も登場した「釈迢空」とは何者か？

本名は折口信夫＝おりくち・しのぶ、明治二〇（一八八七）年～昭和二八（一九五三）年。大阪市生まれで、民俗学の父・柳田國男（やなぎたくにお）に師事した**民俗学、古代学、宗教学、国文学**

の大家だ。古代からの日本を知る手がかりとしての「マレビト＝マロウド＝稀人＝客人＝神」「ヨリシロ＝依代＝神の鎮座する場所」を主張したことでもよく知られている。「マレビト」とは「天や海など外部から時折やって来る有り難い客人」。つまり「神」。「お客様は神様」というわけだ。

民俗学者・古代学者の彼は、万葉集の研究で学位＝文学博士号を取得した第一級の文学者・歌人でもあった。こうしたことから、校歌が万葉集や古代史を強く意識して作られたことが容易に推察できる。

迢空の独創的な考え方と業績は「折口学」と呼ばれ、「柳田学」とともに民俗学界の双璧（そうへき）として今なお燦然（さんぜん）と輝いている。教授を務めた国学院大学などの学府が、民俗学や国文学の分野で今なお評価が高いのは、折口の功績が大きいと言えよう。

折口はまた、斎藤茂吉とともに**短歌界の泰斗**（たいと）（泰山北斗（たいざんほくと）の略＝その道で人々から尊ばれる権威者）でもあった。元々は正岡子規が興した根岸短歌会に出入りし、その流れを汲（く）む

アララギ派の主要歌人だった。その後、北原白秋（きたはらはくしゅう）らと行動をともにし、独自の歌風を築きあげた。折口信夫が短歌を中心とした文学者として使っていた筆名が「釈迢空」。

彼の名を冠した「迢空賞」（角川文化振興財団主催）は今、「短歌界の直木賞」のような存在となっている。

彼の作風は人生のはかなさを詠（うた）うとともに、句点やスペースなど多用しているのが特徴。代表作を紹介する。校歌同様、難解であることに変わりはない。彼の第一歌集「海やまのあひだ」＝大正一四（一九二五）年刊＝から代表的な二首を紹介する。

人も　馬も　道ゆきつかれ死にゝけり。　旅寝かさなるほどの　かそけさ

人間も馬も旅に疲れて死んでしまった。旅のやどりを重ねて今にも消え入りそうに。

ひそかなる心をもりて　をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

何かを心に秘めてその時を迎えたのだろう。命果てるまで無言を貫いたのだから。

戦前、戦中、終戦直後の釈迢空＝折口信夫は高名な知識人の一人だった。佐沼高校の校歌を執筆していた頃の彼の存在を、一定の教養を備えた日本人ならば誰もが知っていた。佐沼高校の校歌はそれほどまでに知られた教養人が精魂を傾けて書き上げた秀作なのだ。ただし、彼は旧制中学校時代、幾何学などの成績が悪くて落第するという前歴を持っている。ゆえに彼は、教壇に立つようになってから、学生たちに落第点をつけなかったという。一方で、自分を落第させた母校の旧制中学校から校歌の作詞を何度も懇願されたが、首を決して縦に振らなかったという。

☆奇妙な姓「釈」は浄土真宗の法名

ところで、なぜ「釈迢空」という筆名なのだろう。

特に「釈」という珍しい苗字。そもそも「釈」とは何だろう。仏教を打ち立てた仏陀（ぶっだ）は「釈迦（しゃか）」もしくは「釈尊（しゃくそん）」とも呼ばれている。「釈」とはつまり、お釈迦様のこと。そ

の一文字の「釈」を名乗ることは、釈尊の愛弟子ということになる。釈迢空もまた、仏の世界に関係がある人物ということになるのだろうか？

「釈迢空」という名前の由来について、本人はそれを全く書き残しておらず、推測する以外にない。そこで辞書をめくった。「釈」とは「僧名の姓につけた文字」もしくは「浄土真宗の法名の上につける語」とあった。浄土真宗の墓所に出向くと、墓碑銘に「釈〇〇」と刻まれている。「釈」を戴くことは、浄土真宗に何らかの関係があることを意味する。

迢空は若い時分、九歳上の浄土真宗の僧侶で仏教改革運動家でもある藤無染（ふじむぜん）と知り合っていることが分かっている。作家・富岡多恵子氏の「釋迢空ノート」によれば、迢空という号は無染によって付けられた可能性があるという。

次に「迢空」。釈迢空に詳しい作家の故丸谷才一氏は生前、「迢空」を「超空」と同じ意味と捉えていた。彼の説によれば、超空は「山魅（さんみ）＝少年に似た一本足の山の精＝妖怪」だという。つまり「仏に仕える少年の姿をした一歩足の妖怪」とでも解釈できる。丸谷氏は

「山歩きの途中で足をくじいた折口を、藤無染がからかって『釈迢空』と名づけたのではないか」と仮定していた。そうだとすれば、折口がその名を気に入って生涯にわたって使い続けたのかもしれない。

彼の筆名が法名なのか、僧名なのか。また、彼がなぜこのような名を筆名に使ったかはどこにも書かれていない。だが、孤高の古代学者、宗教学者、文学者として一生を終えた人物にふさわしい筆名とは言えないだろうか。

☆迢空作詞の校歌は県内で佐沼高のみ

釈迢空は昭和二四（一九四九）年度から二七年にかけて、佐沼高校を始めとして、全国十五高校の校歌を作詞している。青森県八戸市立工業高校、青森県立三戸高校、栃木県立氏家高校、同県立茂木高校、茨城県立下妻第二高校、石川県立金沢二水高校、同県立大聖寺高校、同県立羽咋（はくい）高校、長野県上田千曲高校、同県立桔梗が原高校、愛知県

立瀬戸高校、三重県立鳥羽高校、福岡県立東筑高校。そして、宮城県塩釜高校と佐沼高校。

だが、塩釜高校は男女共学となった平成二一年度、校歌を歌人の俵万智さん作詞に変えた。そのため、県内で迢空作の校歌を持つのは佐沼高校のみとなった。

十五校の校歌を読み比べると、他校の校歌が観念的な文章で綴られているのに対し、佐沼高校のそれは、具体的な風景を思い描くことのできる内容となっている。

一説によれば、「敗戦で財政的な窮地に陥った勤務先の国学院大学を建て直す資金集めのためだった」とも言われている。

☆万葉集の神髄がたっぷり

迢空は校歌について多くを語っておらず、推論に委ねるしかない。だが、「古代語」を駆使できた彼らしい内容と難しさだと感じた。

校歌を眺めていると、迢空は万葉集のエキスを随所に散りばめながら、歌詞を作ったの

ではないかと感じた。特に、万葉の大歌人で歌聖と称される柿本人麻呂の代表歌「**ひんがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾（かたぶ）きぬ**」＝**万葉集第四八番**＝をかなり意識したのだろう。これが校歌を読んで「万葉集」も連想した理由である。

それはなぜか。理由は三つある。迢空が当時の万葉集研究の第一人者であったこと。万葉集に最もたくさんの作品を掲載されたが柿本人麻呂だったこと。そして、人麻呂の代表作がこの「かぎろひ」の歌だったことだ。

そのことは冒頭から読み取れる。「**ひんがしによき国ありて　北上の遠山を朝空に垣とせり**」の光景は、「**ひんがしの野にかぎろひの立つ見えて**」とほぼ同じだ。「**かぎろひ**（陽炎）」とは「日の出のころ、地平線上に出る赤い光」のこと。二番に出てくる「野」などにもその要素が潜んでいる。

「北上の遠山を朝空に垣とせり」には特に、記紀で有名な「**倭（やまと）は国のまほろば　たたなづく青垣　山隠（ごも）れる　倭しうるはし**」も反映されているのではないか。この「まほろばの歌」

は古事記では日本武尊（やまとたけるのみこと）の辞世（じせい）としての思国歌（くにしのびうた）、日本書紀では日本武尊の父・景行（けいこう）天皇作の思邦歌（くにしのびうた）とされる。

有名なこれらの歌と校歌の冒頭「**ひんがしによき国ありて　北上の遠山を朝空に垣とせり**」が描く風景を比べてほしい。「東に輝く朝日、地域は周囲の山々に囲まれている」。二つの歌が描く景色にそっくりではないか。それは偶然だろうか。私は偶然ではなく、迢空が意識的に柿本人麻呂と日本武尊、景行天皇をほうふつできるイメージを校歌の冒頭に持ってきたと考えている。校歌の持つスケールの大きさだけでなく、古代史上極めて有名な二人を現代に蘇らせようとした迢空の能力に驚かされるばかりだ。

こうして見ると、迢空は古代蝦夷側、朝廷側の双方が残した知識や経験を綯（な）い交ぜにしながら、登米市の人々が古代から現代までかけて築き上げた「美しい国」を校歌の行間に刻み込もうとしたのだろう、との推論に達した。

☆作詞の経緯は「百年史」で

校歌が完成したいきさつは、創立百周年を契機に発行された「佐沼高校百年史」（平成一五年十二月刊）に詳しい。それを引用しながら、持論を加えて説明する。

旧制佐沼中学校は昭和二三（一九四八）年四月、現在の新制佐沼高校となった。校歌づくりは二年後の昭和二五年に校歌制定委員会が設けられて始まった。翌二六年、校歌が創立五〇周年記念事業の一環として制定された。作詞は当初、「智恵子抄」で知られる詩人で彫刻家の高村光太郎に依頼したという。だが、「百年史」によれば、光太郎には「西洋の音符に合う作詞はできない」と断られたという。

私はこの説を信じていない。当時の光太郎は東京の戦火で焼け出され、岩手県花巻市（当時は稗貫＝ひえぬき＝郡太田村山口）に蟄居していた。当時の彼は戦争賛美の作品を発表したことを悔い、本来の意欲的な創作ではなく、自虐（じぎゃく）的ともいうべき詩集「典型」を編んでいた。詩集「典型」に綴られた作品群が、前向きな内容を必要とする校歌の対角にある

ことを考えれば、当時の彼が校歌を作る意欲を持っていなかったと推察できる。つまり、校歌の執筆を断った理由は「百年史」にある理由とは少し違うと思っている。

そこで、校歌制定委員会は佐沼高校で教鞭（きょうべん）を執っていた菊池教諭を介して釈迢空に作詞を依頼し、快諾を得た。歌人でもあった菊池教諭は国学院大学高等師範部時代の迢空の愛弟子。迢空は、作詞を依頼される二年前の昭和二三年五月下旬に登米郡佐沼町（現在の登米市迫町佐沼）での文化講演会に招かれ、「赤ふんどし」という題で講演をしている。この講演の開催にも菊池教諭が尽力したことは想像に難くない。

登米地域に一度しか足を踏み入れていない迢空が、観念的な美辞麗句による校歌ではなく、極めてリアリティーに富む登米地域の情景と、説得力のある内容を含んだ校歌をなぜ書けたか。登米地域を愛していた菊池教諭が、恩師にあらかじめ詳しい資料や情報を提示していたと考えると謎が解ける。

それを裏付けるように、「菊池一歌集」には**「大き師ありわれあり成（な）りし肯（うべな）はむ珍（うづ）の白**

珠の佐沼高等学校校歌」の作品が収められており、その末尾にある年譜には、ご本人の短歌作品が校歌の素材となったと書かれてある。程度こそ分からないが、校歌の成立には菊池教諭の貢献があったことを忘れてはならない。

☆菊池一先生のこと

そこで、菊池一先生に触れる。岩手県釜石市の出身。同大学高等師範部を出た直後の大正一四（一九二五）年に旧制佐沼中学校に奉職した。以来、昭和五一（一九七六）年三月までの半世紀にわたって旧佐沼中学校・新制佐沼高校ひとすじに教鞭を執られた。退職後は地域文化活動を牽引し、後に旧迫町の名誉町民となった。

住み経（ふ）れば旅もふるさと愛（は）しけやし佐沼の丘の土くれとなる

住み慣れれば生まれ故郷でなくてもその地がふるさととなり、愛おしくなる。（いずれは第

二の故郷である）佐沼丘陵の土塊となろう。

菊池先生は平成四（一九九二）年四月に亡くなり、登米市立佐沼中学校そばの墓苑に眠っている。墓碑にはこの短歌が刻まれている。「辞世」と言ってもいいだろう。ここでいう「旅」とは旅行のことではなく、生まれ故郷以外の地で生活すること。迢空の詠風を強く受けた格調高い秀歌だ。

この中の「愛（は）しけやし」は、すでに触れた日本書紀にある景行天皇作とされる思邦歌（くにしのびうた）の中にある。「紀」の中では「はしきよし」としてある。墓碑に刻む短歌にこの言葉を使ったのは、先生が前述の「思邦歌」をよほど気に入っていたか、迢空が校歌に盛り込んだ本質を知っていたかのどちらかだと考えている。校歌の制定を考えるうえで、菊池教諭の果たした役割は大きかったと忖度（そんたく）する手がかりの一つだ。つまり、**「校歌の作詞者は釈迢空。作詞補助者は菊池教諭」**と言うことができるのではないだろうか。

再び横道にそれるが、釈迢空は「ずんだ餅」が大好物だったという。昭和二三年五月に当地を訪れた時にもリクエストしたという。菊池先生はその時の逸話を短歌として残し、前出の遺歌集に収録されている。機会があれば、校内の図書室で菊池先生の歌集を開いてほしい。ちなみに「ずんだ」とは「豆打（ずた）」の方言だ。

こうした経緯の後、歌詞が昭和二六年八月二十九日に佐沼高校に届いた。歌詞はさっそく、新進気鋭の作曲家、安倍盛氏に届けられた。安倍先生はひと月もかからずに曲を練り上げ、同年十一月五日の記念式典で披露されたという。

☆校歌から垣間見る古代の登米市

校歌を読み解こうとした時、私はこれまで話した解説とは別の解釈も同時に思い立っていた。それは次のような内容だった。

すでに述べたが、校歌の作詞を依頼された時、稀代の博学者である迢空＝折口信夫の脳

裏には登米市がかつて、どんな地域だったか分かっていたはずだ。

校歌の冒頭「ひんがしによき国ありて　北上の遠山を朝空に垣とせり」で考えてみる。単純に訳せば、先に述べた「東方の一角に住みやすい理想郷があり、北上山系の織り成す境界が朝焼けで輝いていた」となる。だが、私は前々から、この文章には「迢空のある意図」が隠されているのではないかと考えていた。

律令国家から「日高見国（ひたかみのくに）」と呼ばれていたこの辺りには、中央政権にまつろわぬ＝隷属しない＝古代蝦夷たちが住んでいた。有名な「未（いま）だ王化（みおもむけ）に染（したが）はず」との記述があるのも「日高見国」が登場する個所の近くだ。その国を縫う暴れ川が「日高見川」。今の北上川だ。

次の国史書・続日本紀には「海道蝦夷（かいどうえみし）」もしくは「遠山村の蝦夷（えみし）」が登場し、その頭目と思われる人物が「宇漢迷公宇屈波宇（うかめのきみうくはう）」という実名で登場する。彼とみられる古代蝦夷が桃生城を焼失させた記述などがあり、登米地域の先人たちが、天皇を中心とする律令国家側と激しく対峙した様子が描かれている。つまり、二つの歴史書には律令国家の侵略に抗（あらが）

った勇敢な先人たちの行動が詳しく記されているのだ。

既に触れたが、迢空は校歌が発表される三年前の昭和二三年五月、佐沼の地を踏んだ。当地を体験した彼の手元にはその後、菊池教諭からのさまざまな資料が寄せられた。その上で彼は持ち前の独創的な発想を校歌に盛り込んだ、と私は考えている。

日本書紀や続日本紀の中で、古代蝦夷＝私たちの祖先はすべからく「悪者」として描かれている。しかしそれは、律令国家側から見た印象であり、それに連なる都びとが無視できない「独立国」が、この辺りに厳然と存在していたことの証左でもある。

迢空には勇敢な古代蝦夷たちが築いた東国が「理想郷」に見えたに違いない。そこでまず、「ひんがしによき国ありて」と書いたのだろう。続く「北上の遠山を朝空に垣とせり」は、「日高見国の遠山村」周辺に住む人々の勇敢さを称えるための記述とも捉えられる。つまり、歌詞中の「垣とせり」は「遠山村の勇敢な蝦夷たちが防塁＝垣根となり、律令国家の侵略から人々の暮らしを守っている」とも読むことができる。彼はこの個所に二つの意

味を持たせたのではなかったか。

それは、続く「心すぐなるよき人の常に和みて住むところ」によって、遠山村の蝦夷たちが垣になることでこの地域の平和を守ろうとしていた、とも読める。

更に彼は、その末裔に当たる佐沼高校生たちが「清しく行き交ひて若き礼譲(礼節と謙譲の精神)が満ちている地域に住んでいる」と結んだ。つまり私は、「勇敢な古代蝦夷の血を引く君たちよ、他人を思いやる心を忘れずに」と訴えたかった、とも解釈したのだった。

☆他所者が挑む名作の解読

ちょうど十年前の四月。佐沼高校から電話が入った。生徒指導の教諭と、赴任間もない鈴木信也校長だった。「校歌の解説をしてほしい」という内容だった。「なぜＯＢでもない福島県出身の私に?」と理由を伺った。すると返事はこうだった。「格調高い校歌の内容を全生徒に詳しく伝えたい。体育館に出入りしていた貴殿が『見事な内容。これを

歌う生徒がうらやましい』と話していたので……」とのことだった。

本番は約二週間後。「お安い御用です。校歌の全文を送って下さい」と安請負した。フアクスで届いた校歌の内容を読んで、その難しさに尻込みした。己の軽率さに呆れ、「二週間でレジュメを作るのは無理。古典の教諭にお任せになれば……」と返答し直した。

すると、鈴木校長が言った。「古典の先生に依頼したが、全員に断られた。やむなく貴殿に依頼した次第」と。そこまで言われれば、やるしかない。それから二週間。校歌と格闘の末、全校生を対象とした第一の講話に漕ぎつけた。あれから十一回目を迎えた。

私は福島県伊達郡川俣町という阿武隈山系で生まれた。大学卒業後に新聞記者として主に東日本各地を回り、記事や小説、短歌などを作りながら、さまざまな「校歌」に接してきた。同時に歴史好きでもある私にとって、釈迢空という人物は「神」にも等しい。その御仁が作詞した校歌を、何の疑問も感慨も持たずに歌っている佐沼高校生の姿を羨望の眼

差しで見詰めてきた。

つまり私は佐沼高校ＯＢではない。この校歌もろくに歌えない。授業を依頼された時、校歌を歌えない者にその資格があるのだろうかと悩んできた。だが、考え方を変えてみた。佐沼高校の関係者が迢空の歌詞を「校歌」と捉えているのに対し、私は崇高な「文学」と見ている。校歌に関する文学論を展開するだけならば、歌えなくても特に問題がないのではないか。むしろ、佐沼高校に対する思い入れがない分だけ冷静に校歌を分析でき、説得力が増すのではないか。そう考え直し、平成一八年度から講師を引き受けた。

私が校歌を語る適任者かどうかは分からない。けれども、人生の途中で巨星の名作に遭遇できたことを縁（えにし）として、日ごろ考えている校歌の解釈や持論の披瀝歴を始めた。その結果、二八年度ちょうどで十年目、十一回の授業を迎えた。最初の年度が全校生を対象としたので、延べ十三学年、優に三千人以上の生徒に解説した計算になる。

古代の言語を駆使できるほどだった迢空の作品は、「暗号」と「記号」のみで話す二十一

世紀の若人には理解が極めて難しい。その原因は三番の歌詞「代々の経験とほけれど　匂ひやかなる近代の智識の外のものならず」を実践しなくなったからに他ならない。

佐沼高校では以前、迢空から贈られた「宝」の習得を生徒会や応援団に委ね、学問的な考察を怠ってきた。新入生に昼食を取らせず、強制的に覚え込ませていた。そのため、新入生は「怖い先輩に怒鳴りつけられ、嫌々ながら歌わされる難しい歌詞の校歌」のイメージを刷り込まれた。とどのつまりには、校歌が何を言わんとしているのかを理解しないまま巣立つ卒業生が大勢現れるようになった……。

校歌の講話を長く続けてきた。だが、校歌の謎解きは一向に終わらない。逆に、毎年のように新たな疑問を次々と提供してくれる奥深くて不思議な逸品であり、謎解きは永遠に終わりそうにない。皆様もぜひ「学ぶことは面白い」ということを再確認しながら、稀代（きだい）の秀歌を身近に歌える幸せを噛（か）み締めてほしい。

（平成二七年四月十五日）

諸国遍歴（主に職歴・文化・スポーツ面での）

一九五三年一月　福島県伊達郡川俣町生まれ　町域の半分は現在、福島第一原発事故による避難指示解除準備区域＆居住制限区域
七五月四月　福島民友新聞社入社　福島市、会津若松市、本宮市に勤務
八一年十二月　朝日新聞社入社　八四年三月まで朝日新聞仙台支局迫駐在
その後、九五年五月まで青森県上十三地方、新潟県佐渡、山梨県富士五湖地方、東京本社の各地に勤務
九三年三月　登米市迫町新田の伊豆沼畔に自宅を新築、翌年に本籍を移す
九五年五月～九八年三月　朝日新聞湘南支局長（神奈川県藤沢市）
九八年四月～二〇〇〇年三月　朝日新聞編集局校閲部次長
〇二年　朝日新聞社を退社
〇三年五月　財団法人 登米文化振興財団臨時職員
〇四年四月～　同法人事務局長兼登米祝祭劇場館長
〇九年三月～　宮城県文化芸術振興審議会委員
〇九年五月～　同法人理事を兼務
一二年四月　公益財団法人へ移行
一三年四月～現在　理事兼事務局長に
（引っ越し回数と富士山頂登山回数がともに計十八回）
☆登米市バスケットボール協会参与　日本照明家協会二級照明技術者　日本音響家協会三級音響技術者　甲種防火管理者　日本将棋連盟初段
（青森県おいらせ町の中戸俊洋アマ八段と大山康晴永世名人との推薦で八八年に取得ゆえに実力伴わず）など

☆短歌・著作歴

七八年　福島県会津美里町の随筆家で歌人の大石邦子さんから「日記を書くより楽」と誘惑され、不覚にも短歌に手を染める
七八年　短歌結社「国民文学」（窪田空穂の創刊）に入会、故千代國一氏（宮中歌会始選者）に師事
八八年　「国民文学」同人に推挙され、有頂天となる
九六年～九八年　神奈川県湘南支局時代に、「おいらくの恋」の主人公で歌人の故鈴鹿俊子さんと交流、「貴方のお作には雅（みやび）がなく、心の奥底を詠んでいない」と酷評され、ムッとする　彼女と夫で歌人の川田順を小説化した作家・故辻井喬氏にも出会う
〇一年　師との意見対立により、「国民文学」を破門され、無所属に
〇六年度　河北新報土曜版エッセー「蛙（かわず）の独り言」を年間執筆
〇六年春～　佐沼高校で釈迢空作詞の校歌解説ボランティアを開始
〇八年秋　登米市立新田小学校の校歌＆児童会歌を作詞　佐沼高校校歌

○九年秋　第十二回登米市民劇場「夢フェスタ水の里」の劇中歌「はっと抓み唄」を作詞
一○年秋　第十三回登米市民劇場「天翔ける勇者たち～大嶽丸と田村麻呂」の原作小説を執筆
一一年秋　第十四回登米市民劇場「われは丸山 押さば押せ～三代横綱物語」の原作小説を執筆
一二年秋　第十五回登米市民劇場「歌舞伎役者 助高屋 宇藤留蔵～『登米芝居の祖』誕生秘話～」の原作小説を執筆
一二年冬　北上川右岸のお鶴明神を素材にしたふるさと創作民話「お鶴の慈愛 永遠に」を執筆
一三年春　佐沼高校歌解説&登米地域小説集「ひんがしによき国ありて」を自費出版
一四年秋　第十七回登米市民劇場「中田町偉人伝 近代医学の羅針盤 石川桜所物語」の原作小説を執筆＝第十六回「歴史浪漫文学賞」（一五年度 歴史文学振興会主催）最終選考通過
一五年秋　第十八回登米市民劇場「心の絆で山車を曳け～登米（とよま）秋まつり異聞」脚本執筆
著書 歌集「浮遊状況」（九一年 短歌新聞社刊） 歌集「雁」（○○年 柊書房刊） 共著 アンソロジー歌集「現代の第一歌集～次代の群像」（九三年 ながらみ書房刊） 宮城風土記（八四年 宝文堂刊） 歴史紀行「佐渡」（八八年 原書房刊）ほか
☆バスケットボール・下手の横好き歴
八二年　二十九歳の時、競技を八年ぶりに再開 旧迫町青年団チームや佐沼高校ＯＢチームに所属しながら、相沢隆夫監督、早坂彰則主将率いる宮城県№１の登米クラブとも親交を深める
八四年～八七年　青森県三沢市の三沢クラブに所属 内海知秀氏（元日本代表、現日本女子代表監督）の従兄や妹、氏の中学生時代のチームメートらとともに、米空軍三沢基地リーグに招かれてアメリカ人チームと対戦 ＮＣＡＡルールに触れ、この競技が格闘技でもあることを再認識 人種によって審判の判定が変わることも体験
八七年～九○年　新潟県佐渡市の両津高校ＯＢチーム・白陵クラブに所属する一方、当時の教員バスケットボール界№１選手、佐藤正氏（新潟商高監督として九九年岩手インタハイ優勝）と親交を深め、氏が指導する羽茂高校生女子のアシスタント・コーチ
佐藤氏が新潟商高に赴任した九○年以降の十年間、同高応援団長を自認
九○年～九三年　山梨県富士吉田市の社会人チーム「吉田クラブＯＢ」に所属 全国クラブ選手権関東大会に４年連続出場（メンバーは現役時代、全国クラブ選手権で準優勝）
九七年八月　左脚腓腹筋を断裂して現役の続行を危惧
九八年一○月　第三回八幡カップ全国シニア大会（山形県八幡町で開催）に吉田クラブＯＢの一員として参加し準優勝
○一年一○月　みやぎ国体成年男子大会（開催地・旧登米町）選評責任者
○二～○三年　佐沼高校バスケットボール部女子のアシスタント・コーチ
○九年八月　網膜剥離で競技を断念